

## Small Clause をとる動詞

小川 明  
(平成3年9月24日)

### Small Clauses as Objects of Verbs

Akira OGAWA

(Received September 24, 1991)

1. いわゆる第五文型の中には、次の文が含まれている。

(1) A 群

a. I was called Mary after my grandmother.

(小西1980)

b. They elected Kennedy President of the United States. (Quirk et al. 1972)

c. They named the ship 'Queen Mary'. (Hornby 1956)

d. He painted the wall blue. (Quirk et al. 1972)

e. The heat turned the milk sour. (ibid.)

B 群

a. John ate the meat raw. (Hornstein and Lightfoot 1987)

b. She boiled the egg hard. (Hornby 1956)

c. John drank coffee black yesterday. (Tsuzuki 1988)

d. She flung all the windows open. (Hornby 1956)

e. The cat licked the saucer clean. (ibid.)

f. They picked the apples ripe. (Quirk et al. 1972)

(2) a. Do you believe such inquiries useful?

b. I consider what he said unimportant.

c. Do you think him a good worker? (Hornby 1956)

(3) a. I must get my hair cut.

b. I can't have you doing that.

c. We musn't keep them waiting.

d. He made his influence felt. (Hornby 1956)

この三組の例文には、どれも共通に補部に主語・述語関係が見られるが、同時にお互いに何か異質なものも感じられる。それは何か。(1)についてはとりあえず2つの下位群に分けてみる。ただどのくらいきれいに分割できるのかは、はっきりしない。A群は一般に第5文型を取るとされているものである。B群は普通目的語のみを取ると見做されている動詞であるがたまたま補語を伴っている。この補語は動詞の示す行為が行なわれている時、目的語がどのような状態であるかを示すものと、動詞の行為によって目的語になった結果を示すものとがある。補語が結果を示すときのほうが選択制限はきびしい(cf. Rothstein (1983)). 特にA群について選択制限がきつい。つまり call の時は、名前を示すものでなくてはならないし、elect の時は官職を示すものであり、paint のときは色を示すものでなければならない。

(2)は判断の意味を持ち陳述緩和の働きをする動詞である。それゆえ常に主文の主語は人になる。この点で(1)と(3)のグループとは異なる。これらのグループの多くの動詞については必ずしも主語は人に限られない。(1)のA群の(e)の例文参照。(3)については、

(4) a. The houses had their roofs ripped off by the gale. (小西 1980)

b. The long walk made us all hungry. (Quirk et al. 1985)

c. The sun and the rain are making these plants grow. (八木 1987)

また(2)の動詞に続く主語述語関係の部分は判断の対象を示している、よく知られているように、かなり自由に to be を二つの項の間に挿入することができる。またthat節によってパラフレーズすることが可能な場合が多い。しかし(1)と(3)については一般にできない。さらに(2)のグループについては否定辞 not および文副詞がたやすく生じることができる。これは意味的にこのグループの動詞が「判断」を示すからだと思われる。

- (5) a. I consider Mary *not* happy with the result.  
 b. I consider John *not* a genius.  
 c. I consider that building *probably* under construction.  
 d. I consider John *possibly* a genius.  
 (Suzuki 1988)

(1)と対立して(2)と(3)においては虚辞の there と it が生じることができる。

- (6) a. We consider it possible that it will snow.  
 b. The witch doctor made it rain with magic.  
 c. I've never seen there being so many mistakes in your paper.

これら3つのタイプのあいだには、構造的にはどのような差があるのだろうか。中村その他(1989)によれば(1)では目的語と補語はひとつの構成素を成さないが(2)では構成素を成し小節を形成する。また(3)についても一般に構成素を成し小節を形成すると考えられている。たしかに(1)対(2)、(3)の間には大きな違いがある。しかし従来区別なしに考えられてきた(2)と(3)の間にもいまままで簡単に調べたかぎりでも、違いがあり、二者は明らかに異なった性質を持ったグループを成すと思われる。この異質性は何に由来するのか。

2. 本稿では特に(3)のタイプについて(1)と(2)と比較しながら調べてみたい。まずこれら三種類の動詞を表にしてみよう。

(1A) タイプ call, drive, elect, name, paint, send, turn など

(1B)タイプ open, wash など  
 (この類の動詞の性格上リストにしにくい)

- (2) タイプ believe, consider, find, guess, hold, judge, prove, regard, report, suppose, think など  
 (3) タイプ catch, feel, get, have, hear, hold, keep, lay, leave, listen to, like, make, need, notice, observe, put, see, set, smell, start, want, watch など

本稿で対象にする(3)のタイプの中にはいわゆる知覚動詞と使役動詞が含まれる。まずこのグループの動詞は、どのような要素と共起するのか調べてみよう。have を取り上げて見る。

- (7) a. John has *the water running* in the bathtub. (NP Ving)  
 b. I have *a book being reviewed* by Dwight MacDonald. (NP being Ven)  
 c. I'm having *a new house built*. (NP Ven)  
 d. The cook had *the water hot* in a jiffy. (NP AP)  
 e. The army will have *you a soldier* in the two months. (NP NP)  
 f. He has *his eldest son in boarding school*. (NP PP)  
 g. Happy is when no one has *the television on*. (NP Adverb)

(1)と(2)のタイプの動詞の後には NP NP と NP AP が普通生じることができる。NP Ving, NP being Ven, NP PP および NP Adverb は生じないか少なくとも生じにくい。

(8) \*I consider John off my ship. (Stowell 1983)

ただし次のような文が存在しないわけではない。

- (9) a. We thought him out of country.  
 b. They believed the cat in the garden. (Rothstein 1983)

c. I consider your question off the point.

(Kitagawa 1985)

補語になれるのは NP と AP だけであるとするこのように自由に他の要素を取れる(3)のタイプの動詞は第5文型をとるのではないことになる。

find は二つのグループにまたがるのではないかと思われる。なぜならそのどちらの特長も持つからである。まず(2)のタイプのように to be が生じ、that 節を取ることができる。さらに(3)のタイプのように NP PP および NP Adverb とも生じることができる。

(10) a. I found him (to be) a good father.

b. I find that I was wrong.

c. I called at Smith's this morning and found him still in bed.

d. We went to her house but we found her out.

(小西 1980)

このことは hold についてもあてはまる。次の(11c)の主語が人でないことが、グループ(3)に属することを示す。しかし find と異なりこの二つの用法において多少意味が違ふ。(2)に属すときは、believe の意味で(3)に属すときは、ある状態に保つという意味である。

(11) a. He holds gambling to be immoral.

b. The scientists held that the drug was dangerous.

c. His speech held them silent.

d. He held a bottle concealed in a brown bag.

e. She held them at arm's length.

f. Hold your arms up (out).

g. I must hold his pain where it is, he thought. (やつの痛みをこれ以上ひどくならないようにしてやらなければ、と彼は思った)

(小西 1980)

しかしながら(3)に属する動詞がすべて(7)で挙げた要素と共起できるわけではない。たとえば make は次のようになる。

(12) \*I made Mary looking into a shop window.

(Yamauchi 1990)

それにもかかわらずここで同一の類と見做すのは、後

で述べるように意味の面から考えるとこれらの動詞と共起するこの種の連鎖は共通性があるからである。それゆえ上に述べたような不規則性は個々の動詞の一般化できない固有な性質であると思われる。

3. Stowell (1978) は、be, *circumstantial* have, have got, like, keep, want, need および知覚動詞の後で、NP AP, NP PP, NP ing-verbal complement 等の連鎖が生じることを指摘している。

(13) a.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{There was} \\ \text{we have} \\ \text{The king needs} \end{array} \right\} \left[ \begin{array}{l} \text{NP some butter} \\ \text{[for his bread]} \end{array} \right]$

b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{There was} \\ \text{we have} \\ \text{The king needs} \end{array} \right\} \left[ \begin{array}{l} \text{NP a book} \\ \text{[painted green]} \end{array} \right]$

c. Sally  $\left\{ \begin{array}{l} \text{likes} \\ \text{wanted} \\ \text{kept} \end{array} \right\} \left[ \begin{array}{l} \text{NP the hens} \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{in the barn} \\ \text{locked up} \\ \text{pecking at dirt} \end{array} \right\} \end{array} \right]$

d. Help!  $\left\{ \begin{array}{l} \text{There's} \\ \text{I don't want} \end{array} \right\} \left[ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{a dozen pigs} \\ \text{loose} \\ \text{a drunk getting} \\ \text{sick} \end{array} \right\} \end{array} \right]$

この連鎖は上のリストであげられているものと重なることから明らかなように、ここで問題にしているものと同じである。また Stowell はこの連鎖が「状況 (situation)」あるいは「出来事 (event)」を表わすとしている。この指摘は正しいと思われる。もちろんこの連鎖の生じる所には名詞句も可能である。「所有する」「存在する」「必要である」「好む」「望む」「保つ」の対象は名詞句の示す「物」ばかりだけではなく「状況」でも意味的に整合する。つまり「存在する」のは「物」ばかりでなく「状況」でもいいし「必要である」のは「物」ばかりでなく「状況」でもいいのである。

(14) a. There have always been wars.

b. There are two buttons missing.

(15) a. He needs a new suit, doesn't he?

b. I need my coat mended.

(14 a)のように名詞句の場合は物の存在を示すのに対して、(14 b)のように小節の場合は「ボタンがなくなっている」状況が存在していることを示す(cf. 小川(1991)). (15)についてもこのことは成り立つ。

ここで肝要なのは NP XP の連鎖が構成素を成しているこの全体の意味が「状況」ないしは「出来事」を表わすことである。正確にいうと、構成素を成していることは Stowell 自体は主張はしていないがその後そういうふう考えられるようになった (Safir 1985)。またこの小節の生じるところに名詞句も生じ、どちらの場合も動詞の意味はほぼ同一であることである。

4. さらに詳しく具体的に意味の観点から調べてみよう。(7)のような have の用法について, Quirk et al. (1972 : 961-2) はこの種の have が必ずしも「所有」の意味を持たないことを指摘する。たとえば My friend had his watch stolen. の文は「所有」ではなくて、「所有しなくなった」ことを意味する。しかしこれは have の次の名詞句 his watch だけに注目しているからである。his watch stolen 全体を「目的語」と考えれば、主語 My friend は「状況」his watch stolen を「所有」していることになる。このことは、I have two buttons missing (on my Jacket). と云う文にも当てはまる。実際 Murakami (1988) は関係文法のわく組を用いてこの種の連鎖を名詞句とパラレルに扱っている。この種の have 構文は「使役」とか「完了」とか「受身」のさまざまな意味を持つ。

(16) a. My friend had his watch stolen.

b. He had all his enemies imprisoned.

(Quirk et al. 1972)

c. She has had some poems published.

(Quirk et al. 1985)

(a) は「受身」であり、(b) は「使役」である。(c) はどちらの意味も持つ。また (b) の his enemies の代わりに his men を入れれば簡単に「受身」に転じる。しかし have 構文に共通なのは have がある状況を所有する意味を持つことであって、色々な意味を持つことは派生的に出るのである。

実はこのような考えは他にも見られることがわかった。

たまたま次のような箇所に出くわしたからである。原沢 (1979 : 46) は、次のような鋭い観察をしている。

have a person do は通例「人に～させる、してもらう」と解されているが「A person does ～という事実または事態が起こっている」の意であって根本的な文法解釈としては使役表現ではない。もしこの文 [It must be nice to *have* everybody *like* you.] を「すべての人をして君を愛するようにさせる」としたら厳密には誤訳となろう。真意は It must be nice *that everybody should love you.* である。したがって I had the barber cut my hair yesterday. にしても厳密には「刈らせた」のではなく、The barber cut my hair yesterday. を意味を変えずに I を主語とする文に変形すると上の文になるのだと解してよい (ただし使役解釈が全くの誤りだと言っているのではなくて、第二義的、結果的なものだと言っているのである)。・・・引用文 [But, at the same time, this sudden burst of activity *has* many people more than a little *worried.*] は Many people are ... worried. をその agent を主語とした文に変形したものと解せる。Curme がなぜこれを Passive of experience と呼んだのかは明らかでないが、察するに、例えば I had my hair cut. において「I が my hair is cut を経験として持った」ということだろう。・・・ I had it coming. なども It was coming. を経験として表現したのであって、これを「それがやってくるように仕向けた。その種は自分が蒔いた」とするのは単なる俗説で、「私の経験としてそれがやって来た」が正しい解釈と思える。

ここで have が名詞句を取ろうが、小節を取ろうが同じ「持つ」という意味を持っていることに注意をすべきである。

5. 次に知覚動詞について調べてみよう。Stowell がこの種の連鎖の存在を着想したのは、Jenkins(1975) の同一の連鎖が知覚動詞のあとで生ずるという観察に負っている。ここでも名詞句の場合は物の知覚を、小節の時は状況の知覚を表わしている (Rothstein (1983 : 166) は知覚動詞と使役動詞の補部は命題 (proposition) ではなく、出来事 (event) の意味を持つことを

指摘する)。

- (17) a. I see two birds.  
 b. I've never seen John so sick.  
 c. I saw something moving.  
 d. I saw a police car parked across the way.  
 e. I saw him at working.

(小西 1980)

榊原 (1980) もまたこの種の連鎖が知覚を表わす表現と結びついていることを指摘している。知覚動詞以外の所にあらわれる榊原の例を挙げてみる。

- (18) a. John angry is a scary sight.  
 b. He was excited by the sight of his horny wife being done roughly by this huge, hairy young man.  
 c. It was a yellowing Polaroid photograph of T. J. on a horse.

しかし「状況」ないしは「出来事」の意味と整合する環境であれば、知覚表現と結びつかなくても生じることができる。このことはいままでの例から明らかであろう。念のために次の例を挙げておく、

- (19) a. Everybody yelling about taxes (these days) is an interesting development.  
 b. Moses Malone an invalid is the last thing the Bullets need.  
 c. Susan in New York is what we must avoid. (Hornstein and Lightfoot 1987)  
 d. Workers angry about the pay is a situation to avoid. (ibid.)

ただし主語の位置に生じる場合は be 動詞の時に限られる。

- (20) a.\* Her in New York bothers me.  
 b.\* Workers angry about pay frightens employers.

6. 次に使役動詞 get, have, make について調べてみる。(let の後に生ずる連鎖はごく限られている。NP bare V のほかは NP PP か NP Adverb である。それゆえこのグループからは外すべきだと思われる)。動

詞そのものが生じる時は get の場合は to を伴い、have と make の場合は伴わない。どうしてこのような差があらわれるのかわからない。have については例を既に挙げたので、get と make の例を挙げておく。

- (21) a. He got his shoes and socks wet.  
 b. Please get your hair cut.  
 c. They got the fire under control.  
 d. Tom got John out.
- (22) a. The hot weather makes some people sleepy.  
 b. A good purpose makes hard work a pleasure.  
 c. Can you easily make yourself understood in English?

(小西 1980)

さてこの3つの使役動詞の使い分けはどのようになっているのか Celce-Murcia et al. (1983: 480-2), 八木 (1987: 80-97, 126-36), Ikegami (1990: 181-203) を参照にして列挙してみる。

その際  $X \left\{ \begin{array}{l} \text{get} \\ \text{have} \\ \text{make} \end{array} \right\} Y \left\{ \begin{array}{l} (\text{to}) \text{do} \\ \text{done} \end{array} \right\}$  という図式で表

わそう。

get : X が Y を説得, 強制する。  
 X が Y do を成就するのが難しい時 (have と対照的)。  
 X 自身が Y done の行為をしたことを示す場合には have ではなくて get のほうが普通。  
 Mary likes to cook, so she always gets the job done well.  
 X は人間, Y もまた多くの場合人間。

have : X に支配力, 物理的な強制を表わす時は使われない。  
 Y が do をしたいと思っている時使える (make は駄目)。  
 Y の側に X にたいして抵抗しようとする気がない。

make : Xは無生物 (inanimate) のほうが多い。

Xが人間のとき, わざと意図的にするという意味はない (get と対照的)。

結果に重点を置く (get と対照的)。

おおよそ以上のようなことになるが, この性質は動詞が Y (to) do, Y done を取るときだけでなく本稿で扱っている他の連鎖を取る場合にも当てはまるであろう。さてこれらの性質は目的語にただの名詞句を取った時にこれらの動詞の持つ基本的な意味と用法に対応していることに注意すべきである。get は「獲得する」, have は「持つ」, makeは「作る」。そしてget は能動的であって主語は常に人間になる。haveは静的であって, 主語になれるのは人間を含む生物であっても無生物であってもよい。

- ㉓ a. This house has an excellent garden.  
b. This coat has no pockets.

makeもまた無生物を主語にすることができる。そして目的語は結果を示す。

- ㉔ a. What made this sudden change ?  
b. A mitzvah for one makes a mitzvah for another.  
c. Your dance will make the show.

(小西 1980)

このような観察は次のように考えれば簡単に説明を与えることができる。これらの動詞は「目的語」に名詞句と小節のどちらでも取ることができ, どちらの場合も意味は同じであると。たとえばgetが名詞句を取るときは, 物を獲得することになり, 小節を取るときは, ある状況を獲得することになる。have, makeについても同様である。

7. このように名詞句ばかりでなくて小節も生じるのだと考えるとうまく説明がつくことがある。過去において, 事実は気付かれていたが, うまく説明があたえられなかった例について調べてみよう。まず catch について検討してみよう。

- ㉕ a. He caught the burglar in the act of opening the safe.  
b. We caught him trying to sneak out of

the room.

- c. Suddenly he glanced up and caught me staring at him.

(R. Dahl, *Galloping Foxley*)

- d. I caught them at it.

森(1989: 84-5)は, catchの意味について, 次の指摘をしている。catch ~ in the act (of ~ ing) の catchの意味について, 米国系および英国系の辞典は, discover (unexpectedly); find; detect と定義を与えている。また Merriam - Webster 社の associate editor の James G. Lowe氏によれば,

In construction such as "caught in the act of ..." and "caught ... ing," the verb *catch* does not usually mean "to take hold of: seize"; it is used in the sense "discover or take unawares in a particular act or situation."

である。そこでこの構文は「・・・の現場を見つける〔押さえる〕」と訳するのが適切であろう。しかし現行の英和・熟語辞典の多くはこれに「・・・の現場を捕まえる」と「捕まえる」の訳も与えている。これを「捕まえる」と訳すのは, The policeman caught the thief. の hold; seize の意味の catch と混同しているのではないか。共通点はあるが, 区別する必要がある。

catch ~ red-handed についても「捕まえる」という意味の場合もあるが, 「見つける」の方が本義であろうとしている。COD の R. E. Allen 博士は次のように言う。

In the phrase to *catch* (someone) *red-handed* the verb to *catch* has the general connotation 'come upon suddenly', the important point being that the person is discovered 'in the act'. Use of the verb to *take* in this context would signify more directly the notion of seizure or arrest.

ここで私達にとって重要なことは catch に「捕まえる」と「見つける」のふたつの意味があることである。どうしてこのふたつの意味が出てくるのだろうか。森は,

「Physicallyに catchすることが「捕まえる」であり、visuallyに catchすることが「見つける」ことにほかならない」と言う。どうしてふた通りの意味が出てくるのだろうか。今展開している考えに従えば、「捕まえる」の時は目的語が名詞句であり、「見つける」時は、小節であって「状況」が catchの対象になっているのである。物（人）を捕まえるか状況を捕まえるかの差にすぎない。どちらに於いても catchの意味は同じなのである。このように考えれば自然な説明を与えることができる。

8. 小節は動詞の目的語の位置にのみ生じるのではない。いわゆる付帯状況の with 構文においても現れる。

- ㉞ a. We stayed in bed with the fire roaring in the stove ....
- b. With Emil afraid of snakes, you shouldn't take him along.
- c. With your son a student, you probably don't see so much of him.
- d. With his wife in Florida, Mike feels lonely.

もちろん with の後には、NP も生じることができる。

- ㉞ a. I will go with you.
- b. I bought the chairs with the table.
- Jespersen (1940 : 41) は付帯状況の with について、with が NP を伴う場合とはとてもかけ離れていると述べている。本当にそうだろうか。

It will be noticed that *with* has in most of these combinations a very vague meaning, very far removed from that in "he came with his wife"; it serves only to introduce an accessory or collateral circumstance, ....

また辞書においても、この二つの用法の with は別々のものとされている。大抵前者は「付帯状況」を示す用法、後者は「共に、一緒に」という意味を持つ例とされ別々に扱われている。ここで素朴な疑問が生じる。なぜ他の前置詞ではなく with が「付帯状況」の用法を持つのか。実はこの用法の with もまた「共に、一緒に」の意味を持つのではないか。㉞の名詞句の時、人ないし物

を伴っているのに対し、㉞の小節の時、ある状況を伴っていると考えれば、この疑問に簡単に答えることができる。どちらの場合も、with は「共に、一緒に」の意味を持っているのである。with が共起する相手が、名詞句であるか小節であるかの違いにすぎない。

9. それでは次のような標準的とは見做されない文について考えてみよう。

- ㉞ a. There are lots of vulgar people live in Grosveno Square.
- b. The next morning there was a boy came to see me.
- c. There's something keeps upsetting him. (Quirk et al. 1972)
- d. There was a ball of fire shot up through the seats in front of me. (Lambrecht 1988)
- e. There's a lot of people don't know that. (ibid.)

- ㉞ a. I've two weeks' allowance should be here. (Hemingway)
- b. I had several men died in in my ship. (Swift)
- c. Well, I have a friend of mine called me. (Lambrecht 1988)
- d. I have one of my uncles was an engineer and he told me .... (ibid.)
- e. I have a friend of mine in the history department teaches two courses per semester. (ibid.)

- ㉞ a. It's I have been stupid.
- b. That was Cantercot just went in, wasn't it?
- c. Here are three or four of us pass our time agreeably enough. (『新英文法辞典』)
- d. Mom, this is Rutie wants to talk to you. (Lambrecht 1988)
- e. I guess that was a difference between

me and you was that I always thought with Sylvia it would be over at some time. (ibid.)

従来これらは接触節として考えられてきた。『新英文法辞典』を参照しておさらいをしてみる。接触節というのは He has found the key you lost yesterday. のように連結詞によって結ばれていない形容詞節をいう。たいてい関係詞の省略された関係節として説明されているのであるが、上の文が特殊であるのは、主語である関係代名詞が省略されていることである。現代英語においては関係代名詞が目的語の役割をはたす時、省略が普通生じるのであるが、主語の時は珍しい（これはやや正確ないかたであって、厳密にいうと、目的語であっても省略できない場合もあれば、主語であっても省略できる場合がある）。古い英語における例を挙げてみる（『新英文法辞典』 s. v. Contact - clause より）。

- (31) a. I have a niece is a merchant's wife.  
 (B. Jonson, *Everyman*)  
 b. My father had a daughter lov'd a man.  
 (Shakespeare, *Twelf. N.* II. iv. 110)  
 c. I have words to speak in thine ear will make thee dumb.  
 (Shakespeare, *Hamlet*. IV. vi. 25)  
 d. I see a friend will save my life.  
 (Shakespeare, *Com. Err.* V. i. 283)  
 「このタイプのものも、今日、英・米をとわず俗語では実にさかんに用いられている。」例えば、

- (32) You ain't the one can play a tune on that saw, is you? (Faulkner, *Sound*)  
 しかし、現代の標準英語では、主語となる場合に接触節が使われるのは It is または That is の後、There is (are) と Here is (are) の後、そして There is を節中に含む場合である。最後の実例をあげると、

- (33) a. I've told you all there is to tell.  
 b. This was Juana's first baby — this was nearly everything there was in Juana's world. (J. Steinbeck, *Pearl*)  
 最後の例はその他のものと異なっている。there was の後に生ずる要素を主語と見做している。それゆえこ

では対象にしないことにする。しかし標準的とは云えないが Lambrecht (1988) は何気なく話している時に there is ばかりでなく have のあとに生じる例がかなり多い事を指摘している。

主語の役割をはたす関係代名詞がない接触節という説明は正しいのだろうか。なぜこれらの環境にこの種の構文が生じるのであろうか。どうして他の環境には起こらないのであろうか。このことは接触節という考えではうまく説明できないように思われる。Lambrecht の分析は情報構造を視野に入れて次のように考える。たとえば There was a farmer had a dog では there was を含む S と had a dog を含む S がいわば a farmer を共有してこの二つの S が融合 (amalgam) している。このことは I have one of my uncles was an engineer についても同様である。one of my uncles は I have を含む S と was an enginner を含む S とによって共有されているのである（詳細は省く）。この提案は『新英文法辞典』（s. v. Contact - clause）の次の記述とあわせてみると興味深い。「普通この構文の発達に文法家を用いる説明は *Apo koinou*（共有構文）の原理である。すなわち、たとえば There is a man below wants to speak to you において、a man below は There is a man below という文の前半で一役を勤めるほかに a man below wants to speak to you という文の後半においても主語の役を勤めている。つまり両者の中間にあって2度表わすべきものを1度ですませたものとして説明する。」しかしこれらの説明ではなぜこの環境にこの種の連鎖が生じるのかの問題を解くことができない。ここでは全く異なったもうひとつの考えを提案したい。上の文の構造を次のように考える。

- (34) a. There was [<sub>S</sub> a farmer had a dog]  
 b. I have [<sub>S</sub> one of my uncles was an engineer ]  
 さらに (30 a), (30 d) も同じように考える。  
 (35) a. It's [<sub>S</sub> I have been stupid ]  
 b. Mom, this is [<sub>S</sub> Rutie wants to talk to you ]  
 ここでは関係代名詞節はまったく存在しない。There was, I have, It is, this is のあとに名詞句が生じる



がその代わりにSが生じているのである。実はこれらのSが生起するところは小節が生じることができる(haveの例は(7)を参照)。

- (36) a. There were several dogs barking.  
 b. There was a man sick.  
 c. Later on I heard the sound of croquet balls, and looked out again, and it was Charles Wilcox practicing.  
 d. Hello. This is John speaking.

既に述べたように、小節は「状況」を表わす。時制文もまた「状況」を表わすことができるのは明らかである。この共通の意味を介してこれらの時制文が派生的に生じたのであるとその存在を根拠づけることができる。a farmer had a dogという状況が「あった」、one of my uncles was an engineerという状況を私は「持った」ということになる。ただ(36)の例だけはうまく説明できない。

10. 最後にひとつの事実を指摘しておきたい。次のような小節の主語がないと思われる形が存在することである。

- (37) a. I feel cold.  
 b. I felt justified in holding back some of the results of my own investigation.  
 c. She soon got well again.  
 d. Don't get excited.  
 e. You're getting (to be) a bad influence on my children.  
 f. She kept warm.  
 g. Why does she keep giggling?  
 h. They keep friends.  
 i. We made ready for battle.  
 j. She will make a good teacher.

これが単なる偶然なのか今のところよくわからない。事実の指摘のみに止めておきたい。

11. 本稿ではsmall clauseをとる動詞について考察を行なった。small clauseの分布は想像以上に広く行き渡っているように思われる。さらに機会を捉えて調べてみたい。

## 参 考 文 献

- Celce-Murcia, Marianne, and Larsen-Freeman, Diane. 1953. The grammar book: An ESL/EFL teacher's course. Rowley, Mass.: Newbury House Publisher's, Inc.
- 原沢正喜. 1979. 『現代英語の用法大成』東京:大修館書店.
- Hornby, A.S. 1956. A guide to patterns and usage in English. Tokyo: Kenkyusha.
- Hornstein, Norbert, and David Lightfoot. 1987. Predication and PRO. Lg. 63. 23-52.
- Ikegami, Yoshihiko. 1990. 'HAVE/GET/MAKE/LET/+Object+(to) Infinitive' in the SEU Corpus. 国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』, 181-203. 東京:くろしお出版.
- Jenkins, Lyle. 1975. The English existential. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Jespersen, Otto. 1940. A modern English grammar on historical principles. Part V. London: George Allen & Unwin.
- Kitagawa, Yoshihisa. 1985. Small but clausal. CLS 21. 210-20.
- 小西友七編. 1980. 『英語基本動詞辞典』東京:研究社.
- Lambrecht, Knud. 1988. There was a farmer had a dog: Syntactic amalgams revisited. BLS 14. 319-39.
- 森 昌一. 1989. 「'catch'の意味」『英語教育』11月号, 84-5.
- Murakami, Takashi. 1988. Multiattachment in *have* constructions: Interplay of relational grammar and localism. 『英語学論説資料』20. 第3分冊. 423-9.
- 中村 捷, 金子義明, 菊地 朗. 1989. 『生成文法の基礎』東京:研究社.
- 小川 明. 1991. 「There 存在文についての一考察」千葉修司・小川 明・藤原保明・山田宜夫・児馬 修・八木孝夫編集『現代英語学の諸相』(宇賀治正明博士還暦記念論文集), 377-86. 東京:開拓社.
- 大塚高信編. 1970. 『新英文法辞典』東京:三省堂.
- Quirk, Randolph; Sidney Greenbaum; Geoffrey

- Leech; and Jan Svartvik. 1972. A grammar of contemporary English. London: Longman.
- . 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.
- Rothstein, Susan. 1983. The syntactic forms of predication. MIT dissertation.
- Safir, Kenneth. 1985. Syntactic chains. Cambridge: Cambridge University Press.
- 榊原弘章. 1980. 「知覚意味と補文選択」『英語学』22. 89-100.
- Stowell, Timothy. 1978. What was there before there was there. CLS 14. 458-71.
- Suzuki, Toru. 1988. An analysis of small clauses and perception verb complements. English linguistics 5. 54-70.
- Tsuzuki, Masako. 1988. Depictive secondary predicates versus conditional secondary predicates. English linguistics 5. 71-90.
- 八木克正. 1987. 『新しい語法研究』京都: 山口書店.
- Yamauchi Nobuyuki. 1990. On the complement structure of perception verbs and causative verbs. 『英語学論説資料』22. 第3分冊. 581-4.